

「気付くこと」から「知りたい」へ、 そして「行動」へとつながる国際協力活動

井口 久美子（奈良県 心理士）

●行ってみないとわからない

以前から細々と個人的に途上国の支援をしていた私は、JICAの活動に関心があった。国際交流セミナーで偶然手にした一枚の「国際協力レポーター募集」のチラシを見て、「百聞は一見に如かず」と手を挙げた。一般的にイメージされているアフリカは貧困、干ばつ、治安が悪い、暑いなどマイナス点が多く聞かれる。が、本当なのか？その疑問がぬぐえず、真っ白な視点で出国した。降り立ったエチオピアは涼しく、空港付近は都市化され、今まで周囲から聞いていたエチオピアのイメージが吹き飛んだのである。

●本当の国際協力を考えるチャンス到来

国際協力レポーターとして派遣される前からJICAについては少しは理解していたつもりでいた。国内が大変な時に海外支援どころではないだろう、まず自分の国へ税金を使うべし、との声もあると聞いたことがある。しかし私は、国内支援と海外支援を混同した意見には賛同できない。かつては日本も支援される側だった。足りない部分をお互いに助け合い共に高め合えるのが自立した国ではないだろうか？と思っていた。今回、「行かずして語れず、行動あるのみ」を実践できることになったのだ。私は、相手のことを思うなら魚を釣って与えるのではなく、魚の釣り方を教え、やって見せ伝えていくことが本当の自立につながるのだと考えていたので、歴史や文化の全く違う国で、日本の支援がどういう形で行われているのか、その国にとって本当の自立につながる手法なのかを見るチャンス到来にワクワクしていた。

●行って、見て感じた国際協力活動の場

視察第一ヶ所目は「エチオピアカイゼン機構」。カイゼンプロジェクト副総括に「カイゼン」は今や日本だけの手法ではなく、世界の生産手法の源であるとお聞きした。「5S」（整理、整頓、清潔、清掃、躰）、そして無駄をなくす。余分に作らない、持たないことがその後の動作の無駄などを出さないことになると教えていただき、私はこれに甚だしく感銘を受けた。これは我々の日常においても当たり前のことでありながら、なかなかできないことだ。お話の後、「カイゼン」を取り入れた靴工場を見学した。ラインに従って作業をする人々はみな誇らしげに見えた。丁寧な作業は苦手のようなのだが、それぞれ楽しみながら一生懸命仕事をしていた。商品管理倉庫も整理されていたが、我々の感覚からすればまだこれからだろう。在庫保管倉庫は禁止ライン内にも商品が置かれ、日本人スタッフがいないと積み上げられた商品がなし崩しになることもあるとのこと。時間管理が苦手、見ていないと手を抜こうとする気質があるなど、なかなかしっかりと「カイゼン」を定着できないらしい。国内向け商品はゆがんだ箱に入っていたり、壊れた箱があったりでビックリしたが、日本向け輸出品はきれいな箱にしっかりと梱包されていた。もしかしたら相手に合わせる柔軟性があるのかもしれないなどと想像しながら工場を後にした。

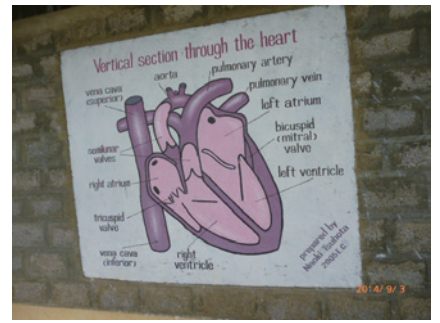
次の視察先はエチオピア経済をつなぐ国内唯一の国道一号線に架かるアワシュ橋。日本の技術を駆使して100年耐え得る新橋の建設現場を目指し、我々を乗せたバスは、埃をまき散らす悪路をひたすら走った。作業員の四分の一は女性だそうだ。こんな辺鄙で危険な工事現場でも女性が力を発揮しだしている。建設材料には、現地のセメントを使っているそうだ。現地のセメントは、強度の面で苦勞しているとのこと。資金面だけではなく現地材料の使用、現地人雇用などで、全てにおいて必要な支援を行っていると感じた。

ただアワシュ橋の建設場所の少し下流に中国が建設をしている陸橋がありありと見え、協力国それぞれ得意とすることを分担し連携できれば、もっと効率的に動けるのではないかと、そんな時代が早く来ることを願った視察でもあった。



エチオピア観光通商公社
ここにも「カイゼン」が導入されていた

子どもの教育と環境をテーマに仕事をしている私にとって、マルカサ高校の体育指導で派遣されている青年海外協力隊員と会えることはとても楽しみだった。2009年に設立されたマルカサ高校の校舎は平屋建て二棟、その奥にはグラウンドと言うよりただの荒地があった。青年海外協力隊員はその荒地をグラウンドにすることからしていると言う。私は今回の視察の事前学習において、かつて日本の支援は教育や文化といった社会のアイデンティティーに関する分野には直接携わず、文化活動や教育のための施設建設が中心だったと知った。1990年にタイで開催された「万人のための教育世界会議」以降、教育の機会拡大のための国際協力いわゆる国の中身に関する支援が実施されだしたという。マルカサ高校への支援もその影響があって開始されたのではないかと思う。読み書きの習得は、生きるため、命を守るために必要だと強く思っていた私には、途上国の教育に就く青年海外協力隊員の姿を是非見て応援したいと常日頃から熱望していたのである。マルカサ高校に派遣されている青年海外協力隊の輝く姿にこれまでの苦勞を乗り越えたくましく成長していく途中である日本の若者代表の姿を見た気がした。JICAは海外協力のみならず、未来を担う日本の若者をも育てているのだ。「頑張れ、精一杯自分を伸ばせ」と彼に心からエールを送った。



マルカサ高校
以前派遣されていた青年海外協力隊員が校舎壁面に書いた心臓の絵

農民支援や女性の自立をめざしたNGOにしても、社会の価値観も歴史的背景も全く違う国で、そこで育った人々の意見を受け入れながらなんとか良い形を生み出そうとする賢明な姿を見ずして、国際協力を語る勿れである。伝統を重んじるエチオピアで、女性の就労率が高くなってきたことに、今後の発展が期待できる。

ただ一ヶ所残念に思ったのがエチオピア観光通商公社である。青年海外協力隊が開発した商品デザインやチラシは上司の許可が得られてもトップのサインに行きつくまでに時間が掛かり、途中で止まったまま。何年も支援しているにもかかわらず改善が難しい状況である。政府系企業の体質が改革を阻んでいるのかもしれないが、このような支援を続けてもいいのかどうか。検討の余地があるように思う。

アジスアベバ上下水道局のトイレの水が流れなかった。水道局なのに、である。そこに派遣されているシニア海外ボランティアの方は、100年変わらない意識の改革は簡単ではないと言う。エチオピア人は、伝統文化を大切にし、いい人が多く、不愉快な思いはしたことがないとも言う。エチオピアを愛し、エチオピア人を理解しようとするまなざしは優しかった。その方のお話が忘れられない。「長年海外に赴任していたので私は日本の四季をじっくり見たことがない。この任務が終わったら、一年を通して日本の季節を味わって過ごしたい。」仕事部屋には切り取ったカレンダーの桜や海の写真が貼ってあった。途上国支援で駆け回るJICA関係の方々、自分のアイデンティティーを懸命に確保し、赴任先の国を愛し、日本を誇りに思い、任務に就いている。

●みなさんに是非伝えたいこと

想像で流布することから偏見が生まれ、偏見が差別を生む。必要だと思うものがあれば助けてもらう、必要なところに必要な物を提供する、おおらかに受け止め共に成長する思いこそが大事であろう。お互いさま意識は日本人の誇りなのだから。

我々誰にでもできる国際協力、それはまず周りの出来事に気付くこと、気付いたら自分に何ができるかを考えること。それは国内でも国外でも同じでありたい。成熟した社会になるために、これからの日本に課せられた課題であろう。今や「支援」ではなく「協力」なのである。

また、JICAには一つお願いがある。青年海外協力隊員にボランティアの文字が付くと、どんな立ち位置か誤解を生みやすい。日本の一般のみなさんがイメージしやすいような、青年海外協力隊員の働きぶりを的確に表現する名称をご検討いただきたい。

最後にみなさん、「世界の笑顔のために」プログラムをご存じだろうか？家庭で眠っている物品を必要とする国へ送るJICAが行っている事業の一つである。各々が今すぐに見える国際協力としてここに紹介しておきたい。



女性の頑張る姿が未来を語る